

福澤研究センター通信

Newsletter of Fukuzawa Memorial Center for Modern Japanese Studies, Keio University

第26号 2017年4月30日 発行

目次

* 福澤研究センターのより一層の発展へ向けて (所長 井奥成彦) …………… 2	* 井田進也先生、進藤咲子先生を偲んで (西沢直子) … 7
* 穂積八束と有賀長雄の論争について (松田宏一郎) … 3	* 新収資料紹介 …………… 8・9
* 寄書日の丸考 (1) (都倉武之) …………… 4・5	* 主な動き …………… 10
* 「KEIO BAKA」の学徒出陣 (2) (神代忠男氏講座記録) … 6	* センター諸記録 (2016年10月～2017年3月) …… 11
	* スタッフ一覧 …………… 12

戦後日本人が獲得した 最初のオリンピックメダル (レスリング部・北野祐秀獲得)

本メダルは、昭和27年7月23日、慶應レスリング部の北野祐秀 (昭和29年卒) が獲得したヘルシンキオリンピックにおけるレスリング・男子フリースタイルフライ級の銀メダルである。その数時間後に、中央大学の石井庄八がバンタム級で金メダルを獲得し、これが日本勢唯一の金メダルとなったこともあって話題をさらわれてしまったが、北野が獲得したメダルこそ、日本が独立を回復して最初に獲得したオリンピックメダルであった。北野の遠征日記には「先づ一回戦には完全に上手な試合をしよう」「とにかく試合には全力を尽す事だが、半分ひやかしの心算でやれ!!」(7月18日)、「明日は試合なり」(同19日)、「第一回第1番目スエーデンヨハンセンとやり判定勝。明日はエジプト。必ずホールを取ろう」(同20日)とあり、これで記述は終わっている。選手の情報も乏しい当時、一戦ごとに翌日の相手を研究する状態で、第5戦では対戦相手を勘違いして事前研究するハプニングなどもあったという。北野は引退後も、昭和35年のローマ五輪でレスリング日本代表監督を務めた。昨年2月27日の逝去により、レスリング三田会を通じてメダルと賞状、日記が当センターに寄贈された (2016年6月、北野雅子氏寄贈)。

本年は慶應義塾体育会創立125年に当たり、4月には日吉で記念式典及び体育会現43部を紹介する展覧会が行われたほか、12月には三田で体育会の歴史を振り返る展覧会が行われる予定であり、後者において本メダルも展示予定である。
(都倉)



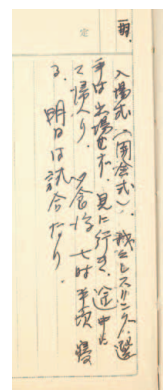
メダル (表)



メダル (裏)



表彰状



遠征日記の記述
(昭和27年7月19日)



福沢研究センターのより一層の発展へ向けて

福沢研究センター所長 井 奥 成 彦
文学部教授

昨年10月に福沢研究センター所長に就任致しました。どうぞよろしくお願い申し上げます。

私の学生時代には外部のビルに小さな部屋を借りるなどして塾の歴史に関する資料を細々と編纂していた「塾史編纂室」が「福沢研究センター」と改称されたのは1983年のことでした。以来、当センターは、創立者である福沢諭吉ばかりでなく広く日本近代史に関する研究、教育、資料の収集、保存、閲覧、展示、編纂とさまざまな業務を担い、また塾からの要請があれば、周年行事をはじめ大小さまざまなイベントに携わるなどしてまいりました。いずれの業務もスタッフの文字通り献身的な努力により、これまで恙なくこなし、好評を博してまいりましたが、機関として充実の度を加えてきている一方、それゆえの問題点も生じてきています。まず、例えば旧図書館の一角という狭隘なスペースではもう足りなくなってきました。また、人的な面では、専任の教職員が教授・准教授各1名、事務職員2名という少人数であり、兼担所員や嘱託・派遣職員、臨時職員に支えられてはいるものの、過大な課題を背負っている状態が続いています。現在は旧図書館の免震工事のために長期にわたって南別館内に分散的に仮住まいを強いられているという問題もありますが、それは2年後の工事終了後には解消されるにせよ、今後センターを発展させる上で乗り越えなければならない課題が少なからずあることに変わりはありません。所長就任に当たって、ここで一度、自分自身への覚え書きの意味も込めて、センターが抱える主な課題を整理し、今後に資することとしたいと思います。

まず、福沢研究センターには、自ら収集する資料以外にも資料が次々寄贈、寄託されてきており、資料は増加の一途を辿っています。それらを適切に整理、保管し、閲覧に供するようにしなければなりません。資料の保管スペースは三田だけでは足りないのです、日吉に設置された資料庫をも使用していますが、それも早晚満杯になるでしょう。そうなると、新たな保管場所が必要になってきます。また、増えてきている資料の整理には、目録作成のためのデータ入力要員を含め、これまで以上に人員が必要とされる状況にあります。さらに、資料の閲覧スペースが現状では十分でなく、閲覧に供される資料の増

加とともに増える外部からの閲覧希望に対して、現有スタッフで対応するには厳しくなっています。また、現在のところセンターではWEB上で資料の公開を行っていませんが、今後はそういったことも考えていかなければなりません。所蔵資料に精通し、資料をWEBにアップする作業を行い、かつ外部からの問い合わせや閲覧請求に適切に対応できる閲覧担当スタッフの増強が必要とされている状況です。

次に、資料展示に関しては、従来福沢研究センターでは、旧図書館1階の小さな一室を展示室としてきましたが、立派な博物館や資料館を持っている国内外の歴史のある大学に比して、慶應義塾のような歴史と伝統ある大学で、しかも創立者の名を冠した機関としては、これでは貧弱と言わざるを得ません。幸い、現在進行中の、塾の複数部門にわたる学術資料展示施設構想によると、従来よりも広い展示スペースをいただけることになりそうなので、これを機に展示内容の充実を実現させたいと思います。その場合、重要なことは、大学の研究機関らしく、学界でのこれまでの研究成果を踏まえ、それを展示に反映させ、世に発信する施設にしなければならないということです。大学の展示施設たるもの、ただ単に「お宝」を並べればよいというものではありません。学内外の福沢研究ないし日本近代史研究は日々進歩しています。現在福沢研究センターには、残念ながら専任の学芸員が1人もいないのですが、資料の扱いに精通し、日々進歩する学界の研究成果を正しく受け止めつつ自らも研究を進め、かつアピール力のある展示をすることができる専任の学芸員を置くことを実現させたいと思います。

以上、簡単ではありますが、福沢研究センターが抱えている当面の主な課題を挙げてみました。増え続ける日常業務に加え、時には来賓への対応を担い、時には大学の宣伝に役買ってきたわりには、センターのこれまでの施設、人員は明らかに不足していました。スタッフは常にぎりぎりの状態で働いています。私が所長を務めている間に、上記のような課題を可能な限り克服し、創立者の名を冠した機関として恥ずかしくないよう、福沢研究センターをより一層充実した研究、教育、資料収集、保存、閲覧、展示活動が行える機関にするよう、努力していく所存です。



穂積八束と有賀長雄の論争について

再考のための覚書

立教大学法学部教授
福沢研究センター客員所員

松田 宏一郎

3月8日に福沢研究センターにおいて、昨年上梓した『擬制の論理 自由の不安』（慶應義塾大学出版会）に対する書評会を開いていただいた。この書評会のために台湾からおいでくださった藍弘岳先生（台湾国立交通大学）、および宇野重規先生（東京大学）のお二人からの丁寧かつ鋭いコメントはじめ、ご出席の方々から、多くのご意見をいただいた。本来、その際に考えたことなどを全体的に整理して記しておくべきであろうが、それは別の機会に譲ることにして、ここでは、出版後に気づいた拙著の問題点、特に史料の扱いの問題点と、掘り下げ不足の論点の一つについて簡単に述べておきたい。拙著の読者の皆様に対するおわびと、今後もっと考えていきたいことを示すのがこの小文の目的である。

拙著第三章「国家に「人格」は必要なのか？—穂積八束の「法理」と「主体」の中で、有賀長雄による穂積八束の帝国憲法理解に対する批判を紹介した。有賀は論文「穂積八束君帝国憲法の法理を誤る」（『憲法雑誌』6-8号、1889年4月5,15,25日）の中で、穂積の「国家とは法律上の想像（Fiction）にして国土にあらず」という言葉に着目している。穂積の言葉と有賀の批判は、国家を法的なFictionとして扱ったらどうなるかという問題について突っ込んだ議論をした例として早いものの一つである。

有賀が取り上げたのは、『法学協会雑誌』第60号（1889年3月25日）における穂積の「講義 大日本帝国憲法法理」である。この点について、私のミスを書いておかねばならない。この章を書いていたときに、『法学協会雑誌』の当該号（首都大学東京所蔵のもの）にあたったが、穂積の「講義」は見当たらなかった。その時点で私は、「講義」は、何か別の形をとって『法学協会雑誌』に付けられたもので、しかも、同時期に『国家学会雑誌』に発表された「帝国憲法の法理」（第3巻25号から31号、1889年3月から1889年9月。後に『穂積八束博士論文集』に収録）と同じものであろうという、大変迂闊な間違っただけの判断をしてしまった。じつは、拙著出版の後に遅まきながら見つけたことだが、穂積の「講義」は『法学協会雑誌』の第60号から20数頁ずつ分けて、頁を別立てにして、付録のような形のものであった。ただし、たとえば国会図書館所蔵の当該誌でも、本来「講義」が付いているはずの号に、「講義」がついておらず、目次にも載っていないものがある。「講義」がついていたものとそうでないものが両方あったのかもしれない。また早稲田大学図書館には、「講義」全体の合本がある。これがどのようにして合本になったのかは、わからない。いずれにせよ、この「講義」は、『国家学会雑誌』掲載の論文とは別のものである。

義」は、『国家学会雑誌』掲載の論文とは別のものである。

上記のような事情で、「法律上の想像（Fiction）云々」という引用について、有賀が何か別の見聞から補足した表現であろうと私は考えてしまった。『国家学会雑誌』掲載の穂積論文で、内容がほぼ同じ一節があるが、Fictionという表記はなかったためである。ところが『法学協会雑誌』の「講義」には、この表記がある。つまり、有賀の引用は穂積の論文を引く際に補足をしたのではなく、句読点などの細かい異同はあるが、『法学協会雑誌』についていた「講義」からそのまま引いたものである。こういった史料確認の誤りについて、版を修正する機会があれば、是非改めたい。

その上で、有賀が、国家とはFictionであるという穂積の文を引用し批判した意図を、今後もっと深く考えてみたい。有賀が論評を書いたのは、初めの24頁分（文章が途中であっても頁の末で切られており、次の号からいきなり続きで始まる）を読んだ時点であろう。「講義」の公刊を最後まで待たずに、批判を始めたのは、穂積による国家の定義に、大きな違和感を覚えたためであろうと推察される。穂積は、国家を「法律上の想像」とみなすといいつつ、他方で「国家と君主と同一体」という。これに対し、有賀は穂積に、本当にそのような解釈をする覚悟はあるのかと、問い詰めていると読める（拙著、77頁）。今もこの解釈は変わらないが、有賀と穂積との論争がもつ思想的な意義について、さらに考えてみる必要を感じる。

穂積は、Fiction云々の文の後に、「国家」とは「政令の出る本体、即ち主権を指す公法上の術語〔専門用語〕にして物質的の有形体を指すにあらず」と述べている。この「公法上の術語」は、公法の内部にあるのか、それとも、公法の外部にあるものについて説明するための「術語」なのか。「主権」は法によって制限されないという考え方を穂積は強調する。しかし、「主権」は、「命令」という、法の内部になれば機能しない力の行使によって、初めて「主権」として立ち現れるのではないかという疑問を、有賀は穂積にぶつけているのである。そして、有賀の批判は、単なる批判ではなく、穂積の憲法論が内包する重要な着眼点の掘り起こしになっている。

穂積の「講義」は、これまで詳細に研究されてこなかったように思われる。また有賀長雄の政治思想の研究もそれほどなされていない。穂積と有賀が引用している西洋の法学文献との照合も含め、両者の論争から浮かび上がる問題関心の内容を、今後の研究でもっと丁寧に検討してみたい。

— 戦争プロジェクト調査余滴 —

寄書日の丸考(1)

都 倉 武 之

寄書日の丸の展示を巡って

「慶應義塾と戦争」アーカイブ・プロジェクトと題して、資料収集を開始してはや3年半が経過した。この間、収集した資料中でひときわ多いのが、寄書のある日の丸である。一見して多くの人の念のようなものを感じずにはいられないその実物の迫力が、安易な破棄をためらわせるのであろうか、他のものは棄ててしまってもこれだけは保存していたと聞くことも多い。当センターへの寄贈もしくは実物確認(撮影による記録)は、計33点にのぼっている。アメリカでは戦利品として持ち帰られた日の丸を持ち主や遺族に返す OBON Society という団体が活動していると聞く。

大学における学徒出陣関係の展示においても寄書日の丸はまず定番の出陳品となっている。戦争体験が十人十色であるように、日の丸も一つとして同じものがない。しかし通常、1 展覧会で展示されるのは1 枚である。

慶應関係者の日の丸としては、白井厚『太平洋戦争と慶應義塾』(1999年)の口絵に掲載された、山崎豊弘(昭和17年9月政治学科卒)所蔵日の丸が代表例として挙げられる(画像1)。教職員ばかり38名の署名(記名のみ)が並んでおり、これほど多くの義塾教職員が整然と署名している例は管見の限りでは他にない。右端には「武運長久／板倉卓造」の大書がある。前法学部長で、高橋誠一郎と並ぶ義塾の長老であった国際法学者の板倉の名の脇で、小泉信三塾長の署名は目立たない。

平成20年5月開催の「小泉信三展」では、当時筆者が把握していた中で最も多様な署名を含んでいた肥田野淳(昭和18年12月学徒出陣、21年9月経済学部卒)の日の丸を展示し、『アルバム小泉信三』(2009年)にも掲載した(画像2)。この旗には21名の教職員の署名があり、一言添えている者が多い。右端に「征け肥田野淳君／小泉信三」と塾長の揮毫が目を引き体裁は、他の多くの旗で共通している。肥田野の手許にはもう一枚、水泳部葉山部門の仲間の署名がある日の丸も残っており(画像3)、実際はそちらを携えて陸軍に入隊、塾長以下の署名入りの方は、自宅に残して家族が空襲下でも守ったという。

これら3点を比較するだけでもかなり異なっていることは一目瞭然である。揮毫を求めた時に誰が居合わせたかという偶然性のほかに、本人が誰に揮毫して欲しいと思ったか、「どこから」軍隊に行くという自意識を有していたか、という帰属意識も反映されているといえよう。平成25年12月に開催した「慶應義塾の昭和十八年」展において、6枚の日の丸を引き出し式の展示ケースに収めて見比べることができるようにしてみたのは、旗の多様性に目が向くようになった結果である。

平成27年10月、穴戸恭一(昭和18年12月学徒出陣、22年9月経済学部卒)より寄贈された日の丸は一名だけ、しかもかの羽仁五郎により「武運長久」と揮毫されていた(画像4)。小泉塾長一名のみの署名がある日の丸は複数現存しているが、この旗の出現は実に衝撃的で、多様性への意識をますます強くすることとなった。

千人針と日の丸を分けるもの

出征兵士への贈り物としては、明治期からの歴史がある千人針も良く知られ、渡邊一弘による詳細かつ多面的な実証研究がある。しかし慶應関係者の手元に残されている数は、日の丸が圧倒的に多く、千人針の寄贈・実物確認は4点(3人分)に過ぎない。その内訳は、八十島信之助(昭和14年3月医学部卒、2点)、鈴木昇(16年12月経済学部卒)、片山崇(18年9月政治学科卒、画像5)の計3名のもので、18年12月の学徒出陣以降については、千人針を受け取ったという具体的な証言や記録を数件得たが、実物は現存していなかった。

千人針は、満州事変以降一種の流行となり、女性が街頭に立ち、道行く女性に赤い糸で千個の玉留めをしてもらうという定型が確立、専用の布なども売られた。しかし街頭での呼びかけは、召集状況がわかるとして防諜を理由に、昭和16年頃には隣組などを通じて自粛が要請されていった。法文系高等教育を半ばで切り上げた若者が一斉に入隊した「学徒出陣」は、総人数が新聞で伏せ字にされるほど防諜意識が高まっている時期にあたった。また、新聞報道を見る限り、昭和15年には、女性に接することを目当てとする男が千人針を呼びかけていると問題視する記事(「鉄箒／街頭の針」S15.11.29朝日)が見えるほど、依然として日常の風景だったようだが、「満州事変に始まり支那事変で最高潮に達したかに見えた千人針の街頭風景も近頃は稀にしか見うけられなくなった」と書くのは、昭和18年初頭の記事である(相原一郎介「底力の培養へ／戦争と民間信仰について」S18.2.16朝日)。このように学徒出陣期には、すでに千人針はかなり下火で、少なくとも街頭では行われなくなっていたとみられる。

また千人針には弾除けのお守りとして着用する機能が備わっていることが多く(主として腹巻き)、戦地で実際に体に巻いていた者も多い。一方でシラミがわいたという話もよく聞くので、たとえ無事生還しても不衛生や傷みなどから、日の丸よりは破棄されやすかった可能性がある。戦利品として持ち帰られたという話も日の丸ほど聞かれないのは、生身の肉体との密着性も関係があるのではなかろうか。

寄書日の丸の流行

では日の丸への寄書はいつ頃から行われていたのかといえば、案外歴史が浅いようである。新聞報道は昭和12年7月の日中戦争勃発以降に集中する。『東京朝日』では読者投稿欄「鉄箒」で論争が巻き起こった。「近来、出征軍人に贈る日章旗や歓送用の日の丸の旗に『武運長久』『皇軍万歳』等の文字をはじめ、神社仏閣の印章や寄せ書き式の署名をしたものなどを見かけるやうになった」が、「遺憾ながら思慮の足らぬ行為」「国旗を墨汁や朱肉で汚すなどは、以ての外」と批判する投書が掲載されると(S12.9.23)、大事なものは「書く人の精神」であり「絶対に『日章旗を汚した行為』にはならぬ」、「送る者の命の現れ」であるとする反論が載り(S12.9.25)、さらにどうしても文字を書きたければ「真中に日の丸を染めた手拭」の鉢巻きにすべきだとか、「今回の事変までいまだ

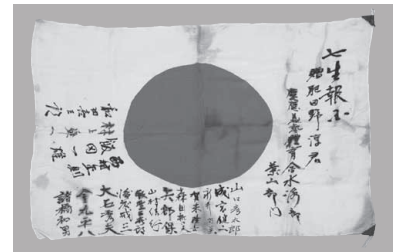
*は当センター蔵



画像1 38名の教職員の署名が並ぶ日の丸(山崎豊弘宛)、本人蔵



画像2* 21名の署名と言葉が記された日の丸(肥田野淳宛)



画像3* 水泳部葉山部門部員の寄書(肥田野淳宛)



画像4* 羽仁五郎による揮毫(穴戸恭一宛)



画像5 千人針(片山崇宛)、海上自衛隊鹿屋航空基地史料館蔵



画像6* 学徒出陣を前に日の丸に署名し合う日吉寄宿舎生

曾て国旗に文字の書入れや神社の印章等を見たことが無い」としてそのまま定着すれば国旗が「恰も登山行者の白衣」ようになる、との再反論が出ている(S12.9.27)。

『読売』では、「日章旗に文字を書き込んではいけません」と題し、「最近国旗に文字を記入することが全国的に流行し、その可否を論議されてゐる」ので、文字の記入は「目的の如何」では「国旗を冒瀆する」として警視庁が取締を各署に通達し、宣伝の文字を紙国旗に記載した菓子店などが警告を受けたと報じている(S12.11.10)。

その一方で、外務省雇の青年が応召に当たり広田弘毅大臣から直々に署名してもらった日の丸を「千人針代りにしっかりと腹に巻いて戦線に向った」(S12.10.19読売)という記事や、海上から灯火管制を視察した5大將が、立ち寄った水上署で時あたかも出征壮行会の最中であった一署員のために日の丸に揮毫したという「出征佳話」(S12.11.21読売)なども見られる。昭和14年になると、文部省の要請で国民の新礼法を検討していた徳川義親の談話として「国旗は神聖なるもので汚してはなりません、しかし、出征の場合は特別です、この時に真心をこめた文字を書くことは冒瀆にならぬでせう、激励した文字を書いた国旗がどんなに士気を鼓舞するか、戦場に征った人のみが知ることです」(「国民新儀礼問答(1) 国旗に文字を書く／出征兵に贈る場合は宜しい」(S14.1.19東京朝日)と報じられている。

つまり日中戦争勃発以降、急速に日の丸に字を書く行為が広まり、それが宣伝等ではなく出征の激励のためであれば許されるという合意が形成されていったことがわかる。

学徒出陣と寄書日の丸

このようにして千人針に並ぶ習俗として定着していった国旗への寄書は、徐々に下火となった千人針贈呈に代わり、学徒出陣の時期には入隊者への贈り物の定番となっていた。そして女性の手によること等による民俗学的なあるいは呪術的な色彩も加わって千人針が持つて

いた弾除け祈願のお守りという意味合いは、主として職場などの男性社会から生まれていった日の丸への寄せ書きによって兼ねられるようになっていった。旗である以上、入隊後の実用性は皆無であるものの、匿名の千人針よりも顔の見える激励であり、学徒出陣期には、揮毫し合うことで同じ境遇の者同士が相互に激励し合う儀式として、メディア・イベントとしての「学徒出陣」の士気高揚に大いに資することとなり、入隊する際には肩から斜めに巻いた日の丸が必須アイテムとなった(画像6)。

なお、繊維不足という問題は千人針と共通していたが、入隊する者に日の丸の持参を許す社会的合意があったことは、やはり当時の新聞記事を見ると明らかで、例えば東大では、内田祥三総長の署名入り国旗を全学生に贈ることを決め、衣料切符の回収を学生に呼びかけたところ、学外からも多く集まったことが美談として紹介されている(「学外からも日の丸切符／東大の出陣学徒に集る激励」、S18.10.28朝日)ほか、東京ではこの時期の応召者には衣料切符不要で区役所で日の丸を販売するという特例まで設けた(「誉れの国旗区役所でも発売／衣料切符は不要」(S18.11.23読売)。

ちなみに、昭和19年の下旬になると、東京師団司令部の要望として「入隊者が肩に掛ける国旗」は「胸に日の丸のマークをつける程度に簡素化したい」(S19.10.5読売)という報道が見られるので、寄書日の丸も自粛機運となっていたようだ。

では、慶應関係者に贈られた日の丸には、どのような傾向が見られるであろうか。このことについては次号検討してみたい。

参考文献 渡邊一弘「戦時中の弾丸除け信仰に関する民俗学的研究～千人針習俗を中心に～」(総合研究大学院大学学位論文、「国立大学法人総合研究大学院大学学術情報リポジトリ」掲載)

昭和 19 年三田会幹事・神代忠男氏講演 「KEIO BAKA」の学徒出陣（2）



陸軍での生活

神宮外苑の出陣学徒壮行会のあと慶應でも壮行会が行われて、陸軍は昭和18年12月1日に入隊しました。よく軍隊に行くのが怖くなかったかと聞かれるけれど、そんなことはなかった。それは二つ理由があって、一つは一人で行くわけではなく友達皆行くから、喜んでではないけれどもしょうがないという気持ち。もう一つは入隊まで二ヶ月しかなく検査や壮行会などで忙しくて考える余裕もなかったのです。

そして区役所から連絡があって六本木の近衛歩兵第三連隊に入ることになりましたが、近衛と聞いてしめたと。天皇陛下をお守りするのだから非常に上品なんじゃないかと。しかし入ってみたら大間違いでばかすか殴られました。第三連隊は予備隊でノモンハン事件の生き残りの兵士などが待機していて、彼らからすると幹部候補生の道がある大学生はすぐに自分たちより上の階級になってしまうので面白くなかった。あんまり殴られるので日記に記録してみたら一日平均15～20回殴られていた。それで休暇のときに家に帰ると私の顔を見て母親が泣くんです。なぜかと思って鏡を見ると殴られすぎてほっぺたがみみず腫れになっていました。

人生というのは何が分けるかわからないもので、初年兵の時にはある学徒兵が酒保を通りかかって饅頭を一つ盗んだ。彼は私と同じく幹部候補生試験に受かっていたけれども、取り消されて南方に送られ戦死してしまいました。脱走兵も3人いたが皆つかまって前線へ送られた。また、のちに陸軍少尉として赴任した浜松では機銃掃射を受けて、同じ防空壕で隣にいた部下が被弾した。彼を担いで医務室に運びましたがそこで亡くなりました。銃弾が少しずれていれば私に当たっていたわけで、たった1m違うだけで体験は変わってくるのです。

私たちは大学仮卒業となっていました。19年9月に大学に残っている人だけで卒業式が行われました。大学から家族に対して卒業証書をとりに来るように連絡があって母親が受け取りましたが、空襲で家とともに焼けてしまい、ついに見ることはできませんでした。

戦争を語る難しさ

戦争の研究をすることは必要だけれど三つの点で難しい。一つは戦争体験の多様さで、100人居れば100人違う話となるから。私のようにずっと内地にいた人、召集後すぐに南方に送られて戦闘に参加した人、特攻隊に志願した人ではまるで違う話になる。私の場合米国兵を初めて見たのは戦後に進駐軍が来たときでした。結局自分の体験で話すしかないから十人十色になる。二つ目は思想の問題。侵略戦争と考える人がいれば自衛の戦争だったと考える人もいて、思想によって言うことが違います。三つ目は戦後70年経っていること。私の予科のクラスメイトには戦後に大銀行の頭取になった人もいれば、仕事に就いてもすぐ上司をぶん殴って辞め、転々として最後は地方裁判所の警備員になった人もいて、このように戦後の経歴が違えば話す内容も当然変わってきます。だから戦争の話は難しい。そこで一番大事なのは聞き分け

ることです。どうしても戦争の話には話し手の主観が入るし主観的な体験は一種の物語だけれど、それだから意味が無いわけではなく、それを自分の頭で判断するのが大事です。大学生はインテリで、自分で考えなくてはいけない。一つの物語しか聞けないのはだめだと思う。福沢先生も『福翁百話』のなかで普遍的なことをいう難しさを指摘しています。

慶應義塾のおもしろさ

私は幼稚舎から慶應で慶應以外知らない。普通慶應を卒業すると年度の三田会が結成されるけれど、我々の代はなかったんですね。それで戦後応援部の団長と私が大学から呼ばれて三田会をつくれと言われました。幼稚舎出身だから連絡が取れるだろうということでした。それで各クラスの幹事を集めて昭和19年三田会を作った。卒業25年で卒業式に招待されたときには、戦争中で出られなかったからと大学にかけ合って自分たちに卒業式をやってもらいました。当時は学生運動が盛んなころで、私たちの卒業式はそのアンチテーゼ的な意味合いを持ち、マスコミにもたくさん取り上げられたので、永沢塾長からは慶應の大宣伝になったと褒められました。

私には普通部時代から家も近くて毎日一緒に学校へ通っていた親友がいました。彼とは戦争に行く2、3日前に、お互い酒が飲めなかったから、田町駅前、今の三菱東京UFJ銀行のところにあった森永キャンデーストアでコーヒーを飲んで、元気で帰ってきたらまたコーヒーで乾杯しようと言って別れました。私は内地勤務だったけれど、彼は品川駅集合ですぐに南方へ送られた。戦後彼の家を訪ねると妹さんが僕の顔をみて泣くんです。兄貴がインパールで戦死したって。しばらくして電話がかかってきてお骨が送られてきたっていうので飛んでいくと、骨壺に紙一枚入っていた。そういうこともあって戦死した同級生のためになにか大学に残したいと思い、鳥居塾長にかけ合いました。その結果、いま塾監局の前には「還らざる学友の碑」という記念碑が建っています。

私は慶應が好きです。何しろ良い学校ですよ。東大を落ちて二浪して、しょうがないから慶應に来たという人がいて、僕ら内部の人間にとってはなんだこの野郎という感じだけれど、面白いことに日吉で一年すると慶應が好きになって僕ら下から来た連中よりも夢中で早慶戦に行ったりする。包容力と云うか、知らないうちに温かく包んじゃうようなところがあるんですね。これは慶應の特徴です。幼稚舎のクラスメイトが東大に行ったけれど、戦後には東大の同窓会には行かず幼稚舎の同窓会に来る。どうしてかという東大では同窓会も役人の位の高い順に座り、それから民間に行った人が座る。だから行かないと言っていた。その点、私のクラスでは大銀行の頭取に対して地方裁判所の警備員が、おまえ偉くなったんだから奢れよって威張っている。社会的な地位は関係ないんですね。これは慶應の良いところですよ。そんな訳でせっかく慶應に学んだのだから慶應を愛してください。これが私からのお願いです。（要約作成：横山寛）

井田進也先生、進藤咲子先生を偲んで

西 沢 直 子

昨年末、井田進也先生の訃報に接し、俄には信じる事ができなかった。福沢諭吉協会のセミナーで、あの特徴あるお声で質問される元気なお姿だけが思い出され、再びお会いできるような気持ちをどうしても拭うことができなかった。今年になって今度は、進藤咲子先生がお亡くなりになったという知らせを受けた。もう何年も前から、春になったら勝海舟生誕の地記念碑がある両国公園でお花見をしようとお約束しながら、果たせないままになってしまった。もう先生方にお会いすることはできないと、淋しい気持ちでいっぱいである。

井田先生は1938年のお生まれで、東京大学をご卒業後、同大学大学院に進まれ、比較文学比較文化を専攻された。1963年に東京都立大学人文学部仏文科の助手となられ、助教授、教授をお務めになり、1998年の御退官後は大妻女子大学で教鞭をとられ、2003から2006年の間は比較文化学部長も務められた。比較思想史として取り組まれたのは中江兆民研究で、1987年に「中江兆民のフランス」で東京大学より博士号を得ている。

先生は兆民研究の第一人者として関わられた『中江兆民全集』の編集委員会で、先生曰く「のびきならない必要」から、無署名文の認定法を編み出されることになった。そして苦労して編み出された方法を『中江兆民全集』だけで「使い捨て」にしてしまうのはいかにも残念と考えられ、他への汎用を試みられた。そのひとつが岩波書店『福沢諭吉全集』（1958～64年、再版1969～71年）の『時事新報』社説の判定であった。福沢は門下生に書かせたものを加筆訂正して社説とすることも多く、判定は兆民より困難であったが、先生は福沢にはAからEまでの5段階の基準を作られ、選別に熱心に取り組まれた。それは『中江兆民全集』編纂時の大変なご努力に裏打ちされた、先生の自信であったと思う。2年という歳月をかけて、中江兆民の特徴が出ていられると言われる言い回しを数千枚のカードに収めて検討され、その結果1度は大きく挫折したのち、溝口雄三先生の指摘で息を吹き返していったときの喜びを、私は先生の口から何度か伺った。無署名文の認定法に関しては、先生のご著書『歴史とテクスト 西鶴から諭吉まで』（光芒社、2001年）に詳しい。

先生はいつも楽しそうに、研究について語られた。1度大妻女子大学で開かれる研究会のご案内をいただいて、多摩校舎まで伺ったことがある。同僚や後輩の先生方、大学院生たちと和気藹藹と議論を進められる先生をみて、比較文化研究において研究者のあるべき姿の理想を感じたことを覚えている。またその頃は比較文化学部長をお務めのお忙しい時期であったと思うが、兆民研究のために今中国語を勉強しているとおっしゃって披露してくださった。先生はつねに好奇心を失うことなく、前を向いていらした。

進藤咲子先生に最初にお会いしたのは、福沢研究セン

ターが立ち上がった1983年のことと思う。先生は資料を閲覧に来られ、当時所蔵資料の管理をされていた高尾浪江さんが対応されていた。先生は「高尾さんがきちんと管理されているから、ほんとうにありがたい」とよくおっしゃっていた。親しくお話をさせていただくようになったのは、私が1度離職して戻ってからであったので、1994年ごろからである。ある方が「進藤先生ってほんとうに「少女」のような方でしょう。おひとり研究に没頭され家事や育児で精神がすれることがなかったから、あんなにいつも穏やかなのよ」とおっしゃるので、そのように思い込んでいたところ、ある日先生から「申し訳ないけれど、娘の大学にFAXしてくださるかしら」と頼まれて驚いた。先生の年代は女性にとって、今よりももっと仕事と家庭の両立が難しい時代であったと想像できるが、先生はご自身のライフスタイルを確立され、また真摯に研究にも取り組まれていたからこそ、いつも穏やかであったのだと思う。

先生のご業績を、国語学に詳しくない私が紹介するのも失礼であると思うが、私は先生のご研究があったからこそ、自分の微々たる研究も少しは成果を上げられたのではないかとと思っている。先生は東京にお生まれになり、白百合高等女学校ご卒業後、東京女子大学国語専攻部に進学され、戦時中の繰り上げで1945年9月にご卒業後、秋田県立能代高等女学校で教鞭を執られた。以前私が秋田県立博物館で井坂直幹に関する展示を見たお話をしたとき、先生はとても懐かしがっておられた。その後1949年から17年間国立国語研究所に勤務されたのち、東京女子大学短期大学部発足にあたり母校の教員として招かれた。さらに現代文化学部新設の際には、言語文化学科の初代学科主任として4年間尽力された。教員としては勿論のこと、研究者としても、明治時代語研究に大きな功績を残された。『明治時代語の研究—語彙と文章—』（明治書院、1981年）をはじめとして、『学問ノスゝメ 本文と索引』（笠間書院、1992年）、『『文明論の概略』草稿の考察』（福沢諭吉協会、2000年）は、福沢研究者には欠かせないものになっている。先生は福沢諭吉や勝海舟といった一般的に著名な人物に限らず、馬場辰猪や小幡篤次郎なども検討され、また三遊亭円朝の語彙も取り上げられて、明治時代語について幅広い研究をされた。その成果は、一面で明治時代語のなかの個別個性的な言葉使いの側面を明らかにし、また他方では明治時代語の全体像も明らかにすることになった。

私がおふたりの学恩に浴したのとは勿論のこと、長い間福沢研究センターの客員所員として、センターの活動を支えていただいた。先生方が残された業績は、福沢研究の土台に大きな力を与えて下さった。私たちはその成果を十分に活かすことができるよう、努力を重ねなければならないと考えている。

平成28年4月から平成29年3月までの間に、福沢研究センターに収蔵された主な資料を紹介します。多くの方々から貴重な資料をいただきながら、すべての資料をご紹介することができず申し訳ありません。(物故者敬称略)

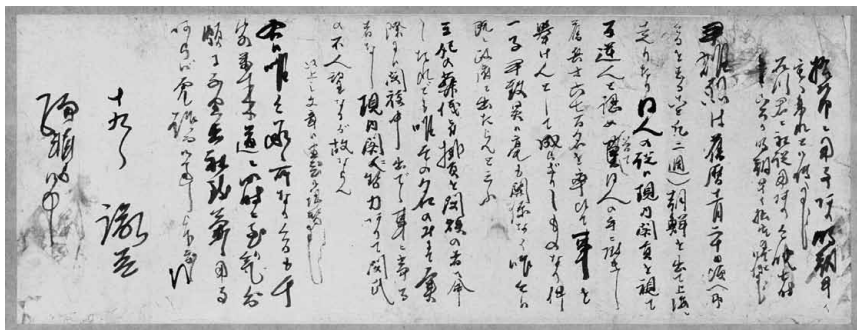
福沢諭吉関係資料

■ 時事新報編集局宛福沢諭吉書簡 明治28(1895)年12月19日付 1幅 【購入】

この書簡で福沢は、『時事新報』に掲載するための朝鮮の情勢についての下原稿を送り、福沢捨次郎、石河幹明への伝言を依頼している。書簡には「十九日」とのみ書かれているが、内容から明治28年12月であることがわかる。

下原稿は2つの内容で、ひとつは高宗の側近武官で、1880年には金弘集の随行員として来日した尹雄烈についてのものである。彼は現内閣を反逆人とみて、かつて部下であった兵士6～700名を率いてクーデターを起こそうとしたが、失敗して上海に逃げ、但し息子の尹致昊には影響がなく、すでに政府に出仕しているらしいというもの。いまひとつは閔妃の葬儀に際して、閔氏一族へ掛員を命じたけれども応ずるものがなく、それは現内閣に勢力があり王妃一族に人望がないからであろう、と述べたものであった。この記述はそれぞれ、明治28年12月20日付の第4468号3面雑報欄に「○朝鮮現内閣の勢力」「○尹雄烈上海に在り」の題で掲載された。伝言を依頼した福沢捨次郎と石河幹明は、ともにこのとき時事新報社員である。

書簡本文は『近代日本研究』33号(2017年2月刊行)に掲載した。

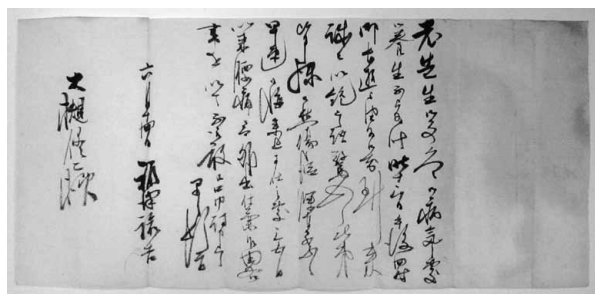


■ 大槻修二宛福沢諭吉書簡 明治11年6月14日付 1通 【購入】

大槻磐溪の死を悼んだもの。名宛人の大槻修二は、磐溪の息子で、明治大正期に活躍した国語学者大槻文彦の兄にあたる。大槻磐溪は、享和元(1801)年に仙台藩医大槻磐水(玄沢)の二男として生まれ、昌平黉に入門して松崎慊堂に学んだのち、長崎で蘭学修業を志したが、シーボルト事件によって1年余で江戸に戻ることになった。天保3年に藩の儒員となってからは、儒学者として名をなす一方で、西洋砲術を江川英竜の塾などに学び、自らも講じた。奥羽越列藩同盟成立の際には佐幕論を主張して家老の但木土佐を助け、そのため処罰された。のち許されて明治4年に東京に出てからは、もっぱら文筆活動を行った。福沢は「磐溪先生は当時の碩儒にして窃に西洋の文明を悦ばれ天下その名を知らざる者なし」(『大槻磐水先生の誠語その子孫を輝かす』『福沢諭吉全集』19巻、岩波書店、1971年、771頁、右下写真 福沢研究センター所蔵)と高く評価している。書簡本文は『近代日本研究』33号に掲載。

福澤と大槻磐溪との交流は古く、福沢が幕府の遣欧使節団の一員として渡欧する際、大槻から「短眼鏡」の購入を依頼されたようである。文久3年4月1日付で、当時仙台藩の養賢堂学頭に就任していた大槻磐溪に宛てた福沢の書簡によると、福沢は忘れてしまったようで、代わりに「竜動図」やナポレオン一世の写真、イギリス人からもらった万里の長城の「瓦片」やピラミッドの「瓦片」等をヨーロッパ土産として送っている。他にも生麦事件についてなど幕府翻訳方として得た情報を知らせている。

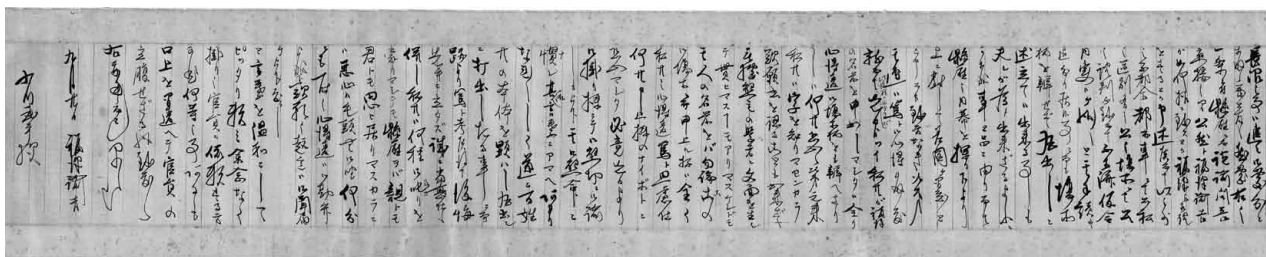
大槻は明治7年10月28日付『朝野新聞』に、世間の『学問のすゝめ』への批判に対して、「読余贅評六号」と題した反駁文を執筆した。福沢は早速11月6日付で感謝の手紙を認めている。その手紙は宛先が「本所相生町三丁目十番地大槻修二様内」となっており、そのころからすでに修二と同居していたことが知れる。



■ 長沼関係資料 4 巻

【購入】

千葉県印旛郡長沼村（現成田市長沼）にあった利根川流域の沼地帯「長沼」の漁業・採藻・渡船営業権をめぐる、江戸時代には長沼村の利権であったものを周辺村落が入会地化しようと考え、県庁側が長沼村に対し排水路浚渫工事を口実に事実上の上地を命じた。長沼村の小川武平は『学問すゝめ』を通じて知った福沢諭吉を頼り、福沢も長沼村側の嘆願に尽力した。今回の資料は福沢が執筆した願書や書簡の案文と思われ、成稿の過程がわかる貴重な資料と考えられる。『近代日本研究』において順次翻刻の予定である。



■ 慶應義塾関係資料

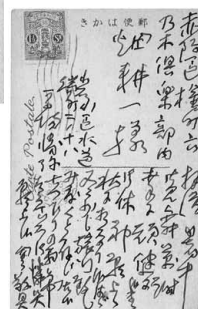
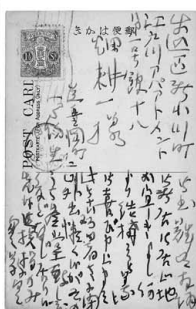
■ 畑耕一宛馬場胡蝶書簡 大正12年7月25日付、同15年10月25日付、昭和11年1月1日付、同年8月4日付

同15年5月25日付（消印による）、年末詳8月3日付、年末詳10月31日付 計7通【購入】

馬場胡蝶は、明治2（1869）年に土佐藩士馬場来八の四男として生まれ、兄に福澤諭吉に将来を嘱望された馬場辰猪がいる。幼少のころ病弱で十分に学問の機会を得られなかったが、明治17年から共立学校で英語を学び、明治22年に明治学院の2年生に入学、同級生となった島崎藤村や戸川秋骨と親交を結ぶことになった。24年の卒業後は各地で英語教師をつとめ、また26年に創刊された『文学界』に加わり、樋口一葉や斎藤緑雨らと交わった。明治39年度に慶應義塾の教員となり、昭和4年度まで大学部予科や普通部、大学部文学科のちに文学部で、英語や英文学、古典研究などを教えた。佐藤春夫や西脇順三郎らが、彼の講義を聴いている。昭和15（1940）年歿。

宛先の畑耕一は、作家や評論家、俳人などとして幅広く文芸の世界で活躍した。広島県の漆問屋の嫡男として生まれ、将来家を継ぐべく大阪の商家に預けられ、市立の大阪高等商業学校に入学したが、予科終了後第八高等学校を経て、第一高等学校の文科に転じ、東京帝国大学英文科卒業後、東京日日新聞社に入社した。その後松竹キネマに勤務、明治大学でも教鞭をとり、昭和2年には教授に就任している。彼が文壇デビューを果たしたのは、大正2年『三田文学』（2月号に「怪談」を発表）であった。

今回の手紙は、大正12年ごろから昭和15年に馬場が歿するころまでのもので、年賀状や見舞等の礼状、訪問の予定など親しい間柄にあったことを窺わせるものである。



❖ 主な動き

主な動き

■ 講演会等の開催

10月22日、三田演説館において福沢諭吉協会との共催による講演会を開催、講師として同志社大学名誉教授の西田毅氏をお招きした。演題は「竹越与三郎と政治教育論—『人民読本』を中心に—」であった。同氏にはセンター客員所員としても長年にわたりご尽力いただいている。



12月9日、落語研究会との共催により、三田演説館において落語会が開催された。今回、演説館については聴衆を塾生に限り、使用は1回のみという条件付きであった。当日は前座に三遊亭金の助があがり、その後、桂歌丸師匠が登場、満席の場内を終始沸かせた。

3月8日に三田研究室棟A会議室において、立教大学教授でセンター客員所員でもある松田宏一郎氏の近著『擬制の論理 自由の不安』慶應義塾大学出版会(2016年)の書評会を開催した。書評者として台湾国立交通大学准教授藍弘岳氏、東京大学教授宇野重規則氏をお招き



した。書評会終了後の懇親会においても引き続き活発な議論が交わされた。なお、松田氏からは出版後に気づいた点についてご寄稿いただいた(3頁参照)。

■ 慶應大阪シティーキャンパス(KOCC)におけるセンター講座

今年度は「福沢諭吉の多事争論—福沢諭吉著作を読む—」をテーマにセンターの所員4名が講義を担当した。講義では『福澤諭吉著作集』全12巻 慶應義塾大学出版会(2002年~2003年)を使用した。各回の担当とタイトルは以下のとおり。

センター准教授都倉武之:「時事新報社説(著作集第7巻に収録)」(1月28日)

教職課程センター教授米山光儀:「学問のすゝめ」(著作集第3巻に収録)(2月4日)

看護医療学部教授山内慶太:「子供向け読物(著作集第2巻に収録)」(3月4日)

文学部教授井奥成彦:「時事小言(著作集第8巻に収録)」(3月18日)。

■ 所員の活動

大阪でのセンター講座はもとより、以下にあげるような行事にも所員の協力を得た。

法学部教授小川原正道:中津市主催福沢諭吉記念第55回全国高等学校弁論大会審査員(12月9日)

看護医療学部教授山内慶太:第182回福沢先生誕生記念会で講演:「福沢先生とスポーツ—体育会百二十五年に際して」(1月10日)

経済学部准教授宮内環:福沢先生117回忌法要時記念講演会で講演:「文明論の概略—グローバリズムの波と一国の独立—」(2月3日)

教職課程センター教授米山光儀:横浜初等部で福沢先生御命日講話(2月3日)

文学部教授井奥成彦教授:幼稚舎で福沢先生御命日講話(2月3日)

同教授:韓国梨花女子大学で講義:「『稲むらの火』の主人公について」(3月16日)

なお、センター専任所員による講演・講義は諸記録にあるとおり。

■ 書架の寄贈

10月29日、センター初代所長を務めた石坂巖名誉教授のゼミ生で構成される石坂研究会(OB代表近藤紀孝氏)から木製の書架をご寄贈いただいた。図書館旧館改修工事によりセンターが仮移転中となっているため、書架は南館9階に仮置きされた。当日は研究会の総会に先立ち、大勢の卒業生に書架がお披露目された。

11月22日には寄付報告のため研究会を代表して近藤氏、猪股靖氏、西川進氏が来塾、渡部理事と面会してひととき歓談した。



■ 国際交流

センターと部局間協定を結んでいる梨花女子大学から昨年8月に短期研修生として学生グループを受け入れ、研修プログラムを実施したが、今年に入ってから2月2日~9日の日程で同大学から学生グループを受け入れた。また、同じく韓国から高麗大学の研究チームが2月13日~17日にかけて来日、相互に交流を深めた。

■ 『近代日本研究』の刊行

2月28日に第33巻を刊行した。特集として「小泉信三没後五〇年」、小特集として「新塾歌制定七五年」、「演説館開館一四〇年 第二部」を組んだ。今回、演説館については2本めとなる論説を神奈川大学工学部の内田青蔵教授にご執筆いただいた。また、特集以外に、昨年3月19日に開催したシンポジウム「歴史と記憶とオーラルヒストリー」の講演録を収録している。

■ 諸会議

- * 平成28年度執行委員会 (10月27日、12月7日、1月12日、3月7日)
- * 小泉基金運営委員会 (1月24日)
- * 平成28年度第2回運営委員会 (11月9日)
- * 平成28年度第3回運営委員会 (3月10日)
- * 平成28年度第2回福沢研究センター会議 (1月18日)
- * 『近代日本研究』第34巻編集委員会 (3月21日)

■ 人事

- 〈所 長〉 退任 米山光儀 (教職課程センター教授)
 ~ 9月30日
- 〈所 員〉 新任 井奥成彦 (文学部教授) 10月1日~
 新任 ミヤン・マルティン、アルベルト (経済学部専任講師) 12月1日~
 退任 ボールハッチェット、ヘレン (経済学部教授) ~ 3月31日
- 〈訪問准教授〉 王賢鐘 (延世大学准教授) 1月17日~2月28日
- 〈事務局〉 新任 高田真規子 (事務嘱託) 10月1日~
 新任 太口功子 (派遣職員) 10月12日~12月9日
 兼務 アート・センター事務主任 酒井明夫 2月1日~

■ 主な来住

- * 一橋大学齋藤修氏、資料閲覧で来訪 (10月4日、2月2日)
- * 福沢記念館への展示資料貸出 (10月12日)、返却 (12月21日)
- * 青柳保子氏、杉本鉞子関係資料の閲覧 (10月19日~21日、1月18日~20日、2月6日~7日、9日~10日)
- * 関西学院吉岡記念館事務室古結章司氏来訪 (10月20日)
- * 日吉地下壕保存の会へ資料貸出 (10月21日)
- * 鶴見大学金文京氏来訪 (10月25日)
- * 塾員松尾隆氏ほか来訪、岳朋会会報を寄贈 (10月27日)
- * 森田優子氏、曾祖父栗田宗次氏関係資料を寄贈 (11月11日)
- * 諸江昭雄氏、戦没塾生川路晃氏関係写真を寄贈 (11月12日)
- * 法政大学笹川ゼミ来訪 (11月21日)
- * 塾員鈴木清俊氏、尊父清作氏関係資料を寄贈 (11月25日)
- * 塾員和田裕氏来訪 (聞き取り調査) (11月29日)
- * 塾員葛輝也氏、吉川和哉氏、慶應あるびょんくらぶ資料を寄贈 (12月5日)
- * 塾員秋元圭子氏、尊父河西三省氏関係資料を寄贈 (12月20日)
- * レスリング三田会を介して北野雅子氏、故北野祐秀氏関係資料を寄贈 (1月6日)
- * 新潟県立文書館横山真一氏来訪 (1月16日)
- * 塾員稲吉資史氏、戦前予科の精勤賞メダルを寄贈 (1月16日)
- * 安井裕二郎氏、慶應義塾関係資料を寄贈 (1月20日)
- * 須田清雄氏、来訪 (1月23日)
- * 国際日本文化研究センター教授瀧井一博氏ほか来訪 (1月27日)
- * 塾員山口章氏、予科射撃大会メダルを寄贈 (1月30日)
- * 藤野和子氏、塾員藤野清氏旧蔵図書を寄贈 (1月31日)
- * 塾員中原悦子氏、尊父門野米二氏旧蔵資料を寄贈 (2月9日)
- * 塾員藤川伊知郎氏ほか、91年三田会記念誌を持参 (2月10日)
- * 伊藤宏見氏、福沢書簡を持参 (2月13日)
- * 国際交流基金関西国際センタージョイクサン氏来訪 (2月17日)
- * 村井康真氏、尊父宇之助氏関係資料を寄贈 (2月22日)
- * 首都大学東京クリス・ベルアド氏来訪 (3月3日)
- * 譚璐美氏、資料閲覧で来訪 (3月6日)
- * 神戸大学奥村弘氏ほか来訪 (3月21日~22日)
- * 山口朝日放送、資料撮影対応 (3月24日)
- * 塾員野崎誠一郎氏、祖父西村政氏旧蔵資料を寄贈 (3月29日)

■ 出張・見学

- * 西沢、都倉、情報保存研究会に参加 (一橋大学) (10月3日)
- * 都倉、環太平洋大学協会シンポジウム参加のため香港 (10月5日~8日)
- * 竹屋、全国大学史資料協議会全国大会のため広島 (10月7日)
- * 西沢、日本史研究会参加のため大阪 (10月8日~9日)
- * 都倉、港区史編集委員会出席 (10月20日、1月17日、2月6日、2月23日)
- * 西沢、全資料協大会参加のため三重 (11月9日~11日)

- * 都倉、慶應義塾戦没塾員追悼会出席 (11月12日)
- * 西沢、ソウル大、梨花女子大で資料収集 (11月15日~19日)
- * 都倉、横山、上原家調査のため安曇野 (11月23日~24日)
- * 都倉、資料調査のため中津 (11月29日~12月1日)
- * 都倉、資料調査のため寺田貞治氏宅を訪問 (12月10日)
- * 西沢、資料調査のため中津 (12月12日~14日)
- * 都倉、展示協力のため上野国立科学博物館訪問 (1月12日)
- * 都倉、資料調査のため中津 (1月13日~16日)
- * 西沢、漢陽大、ソウル大ほかで資料収集 (2月22日~24日)
- * 都倉、資料保存に関する打合せのため慶應義塾高等学校 (2月23日)
- * 都倉、横山、資料調査のため故林潤氏宅を訪問 (3月2日)
- * 都倉、横山、資料調査のため長崎 (3月9日~11日)
- * 都倉、吉岡、横山、上原家調査のため安曇野 (3月13日~16日)
- * (教) 米山所員、福沢旧邸保存会理事会のため中津 (3月22日)
- * 西沢、福沢旧邸保存会評議員会のため中津 (3月29日)

■ 講師派遣

- * 都倉、綱町三田会史跡見学案内及び講演:「慶應ジャーナリズム」(10月1日)
- * 西沢、福沢諭吉記念文明塾で講演:「福沢諭吉の近代社会論における家族」(10月8日)
- * 都倉、慶應義塾全国議員連盟で講演:「『慶應』らしさとは何か」(10月17日)
- * 都倉、川崎市平和館「平和のための戦争展2016」で講演:「大学は戦争のなにを「引き継ぐ」のか」(10月23日)
- * 西沢、麗澤大学で講演:「福沢諭吉の近代社会構想と中津」(10月26日)
- * 都倉、名古屋三田会創立110周年記念式典で講演:「宇都宮三郎と福沢諭吉」(11月1日)
- * 都倉、SFC 高等部大学説明会で講義:「慶應義塾と三田」(12月9日)
- * 西沢、すみだ女性センターで講演:「福沢諭吉に学ぶ個人と社会」(12月11日)
- * 西沢、第121回志木演説会で講演:「福沢諭吉における人間交際と家族」(12月16日)
- * 西沢、東京雑学大学で講演:「福沢諭吉の近代社会論を考える」(12月22日)
- * 西沢、梨花女子大学史学科研修生へ講義:「福沢諭吉と西洋文明の受容」(1月13日)
- * 西沢、慶應看護100年記念第1回リレー講演会で講演:「福沢先生の女性論」(1月21日)
- * 都倉、姫路慶應倶楽部で講演:「改めて、福沢精神とは?」(1月27日)
- * 西沢、すみだ女性センターで講義:「ジェンダーギャップ指数で読み解く男女共同参画の今」(1月31日)
- * 都倉、慶應義塾労働組合で講演:「慶應義塾と政府・軍との関係を考えて」(2月2日)
- * 都倉、東アジア研究所研究会発表:「アジアの近代的变化における人的動態 慶應義塾出身者を題材として」(2月3日)
- * 都倉、豊橋三田会で講演:「福沢諭吉先生と豊橋」(2月8日)
- * 都倉、科研研究会「官版日誌類に関する史料学の構築および戊辰戦争期の情報と地域に関する学際的研究」で講演:「慶應義塾に現存する幕末・維新期板木について」(2月9日)
- * 都倉、婦人三田会で講演:「慶應義塾と戦争を巡る人と資料」(2月13日)
- * 都倉、長野県松本県ヶ丘高校で講義:「戦争を巡る人と資料 戦争の時代について考える方法と意味」(2月21日)
- * 都倉、学生総合センター設置科目(Eラーニング)授業の収録:「気品の泉源、智徳の模範」(2月22日)

■ その他

- * 日吉西別館に資料搬出 (12月19日)
- * 横浜初等部へ福沢資料(乳母車と臼)を貸出 (12月22日)
- * 西沢、都倉、学術資料展示施設検討委員会 (1月11日、1月31日)
- * 都倉、横山、DMC 戦略的研究基盤形成支援事業ミーティング出席 (10月26日、11月22日、1月26日、3月28日)

❑ スタッフ一覧

所 長	井奥 成彦	文学部教授	我部 政男	山梨学院大学名誉教授
副 所 長	平野 隆	商学部教授	川崎 勝	
専任所員	西沢 直子	副所長、福沢研究センター教授	佐藤 正幸	山梨大学名誉教授
	都倉 武之	福沢研究センター准教授	白井 堯子	千葉県立衛生短期大学名誉教授
所 員	池田 幸弘	経済学部教授	曾野 洋	四天王寺大学教授
(兼運営委員)	岩谷 十郎	法学部教授	高木 不二	大妻女子大学短期大学部名誉教授
	澤田 達男	理工学部教授	西田 毅	同志社大学名誉教授
	武林 亨	医学部教授	平石 直昭	東京大学名誉教授
	林 温	文学部教授	田中 康雄	元群馬県立文書館館長
	山内 慶太	看護医療学部教授	平山 洋	静岡県立大学助教
	米山 光儀	教職課程センター教授	藤原 亮一	田園調布学園大学教授
所 員	上野 大輔	文学部助教	前坊 洋	
	梅津 光弘	商学部准教授	松沢 弘陽	
	大久保健晴	法学部准教授	松田宏一郎	立教大学教授
	大久保忠宗	普通部教諭	宮村 治雄	
	太田 昭子	法学部教授	森川 英正	
	大塚 彰	志木高等学校教諭	山田 央子	青山学院大学教授
	小川原正道	法学部教授	林 宗元	韓国関東大校校名誉教授
	加藤 三明	幼稚舎教諭	Craig, Albert	ハーバード大学名誉教授
	Knaup, Hans-Joachim	経済学部教授	Saucier, Marion	フランス国立東洋言語文化大学教授
	斎藤 秀彦	横浜初等部教諭	Nguyen thi Hanh Thuc	ベトナム国家大学ホーチミン市校工科大学講師
	末木 孝典	高等学校教諭		
	馬場 国博	湘南藤沢中・高教諭	研究嘱託	巫 碧秀
	Ballhatchet, Helen	経済学部教授		石井寿美世
	宮内 環	経済学部准教授		吉岡 拓
	Millan Martin, Alberto	経済学部専任講師		堀 和孝
	結城 大佑	ニューヨーク学院教諭		山根 秋乃
				柄越 祥子
				大庭 裕介
				石田 幸生
顧 問	岩崎 弘	元幼稚舎教諭	事 務 局	酒井 明夫 事務長
	小泉 仰	名誉教授		竹屋 早月 主 務
	小室 正紀	同		池ヶ谷麻衣 事務嘱託
	坂井 達朗	同		高田真規子 同
	寺崎 修	同		澁沢 彩佳 非常勤嘱託
	松崎 欣一	名誉教諭		加藤 学陽 同
客員所員	安西 敏三	甲南大学教授		
	飯田 泰三	法政大学名誉教授		
	區 建英	新潟国際情報大学教授		
	片岡 豊	白鷗大学教授		

他に、『慶應義塾150年史資料集』調査員、10名
(3月31日現在)

慶應義塾福沢研究センター通信 第26号

Newsletter of
Fukuzawa Memorial Center for
Modern Japanese Studies,
Keio University

発行日 2017年4月30日 (年2回刊)
編 集 慶應義塾福沢研究センター
発 行
〒108-8345 東京都港区三田2-15-45
電 話 03-5427-1604
<http://www.fmc.keio.ac.jp/>
印 刷 (有) 梅沢印刷所